

恋草

別名 思妻・濱田・恋妻

シテ 濱田の妻（帥の局）

ツレ 濱田の侍女侍従

ワキ 濱田某

「加様に候者は。濱田の何某殿に仕へ申者にて候。諸も頼み奉りし人の北の御方は。帥の局と申て。禁中第一の美人にて候ひしが。今は濱田殿の妻と成給ひて候。爰に又左衛門尉政長殿と申て。隠れなき色好みの御座候が。有時帥の局。大覚寺殿へ御越のみぎり。政長殿かひまみ給ひ。数々の玉章を送り申され候へども。本来まゝならぬ御身なれば。更々御聞入も御座なく候程に。政長殿為方な

き余りにや。情なくも濱田どのを讒し給ひ。流人の身となし給ひて候。北の御方の御歎き大方ならず。今ははや思ひの床に臥給ひ。御命もあやうく見えさせ給ひ候。誠に御労はしき御事にて候。けふはまた雨中。御つれぐに御座候はん程に。参りて御様体をも窺ひ申。御心を慰め申さばやおもひ候。

「命たゞ心にかなふものならば。何か別れの悲しか

るらん。数々に。思ひおもはず。とひ難み。身を
しるあめは。ふりぞ増れる。

ツレ女 「いかに申上候。侍従が参りて候。

シテ 「侍従と申歟。此方へ来り候へ。

ツレ女 「けふは物さびしき雨の中。御心地は何と御入候ぞ。

シテ 「さなきだにいとくるしき枕の上に。窓うつあめ
の音高く。

カル 「夢もむすばぬ思ひねの。難面命のおしかるも。あ

かで別れし我妻に。またもあふせの憑みかな。

ツレ女 「実々御歎き尤にて候。さりながら。御心やすくお
ぼしめされ候へ。殿は御身に御誤りなき通りを。

君聞召及ばせ給ひ。頓て御帰京有べきとの御事也。
唯御心を取りなをさせ給ひ。御薬をも用ひ給はゞ。
すゑは目出たふ御対面にて候べし。

シテ 「嬉しき人の言葉かな。科なき妻の左遷のつみも。
たゞ我ゆへとおもへば猶も。

カル

「五の障りをもきがうへの。身の後の世もをしはか
られて。やるかたもなき小車の。廻りあひなば憂
事も。晴て行なん心の月の。曇らぬ御影憑むなり。

同

「実やたのむの雁金も。花を見すて、行空の。雲井
遙かにたちへだつ。妻の音信もなき世の中ぞ悲し
き。

歌、同

「こぬ人をまつほの浦の夕なぎに。く。焼やもし
ほのこがれゆく。身はうきふねの。よるべも涙の

袖ぞいとなき。よしやしばし社。岩にせかるゝ滝

川の。破れてもすゑの逢瀬の。たのみをかけて。

木綿四手の。神の恵みの明らかに照させ給へ。我

こゝろく。(中入)

次第

「替る浮世もかはらざる。く。妹背の川ぞ頼もし
き。

ワキ詞

「是は濱田の何某にて候。扱も我よしなき人の讒奏
により。遠流の身と成て候へども。我身に誤りな

きむねを君聞召分られ。此度御免を蒙り本領安堵し。唯今都へ上り候。急候程に。是ははや都に着て候。是成館が某が家にて有げに候。浅ましや我流人の身となれば。住こし宿もあれ果て。庭も籬もよもぎふの。昔語りもおもひ出られ。目もあてられぬ有様にて候。

サシ「実や風碧瓦を飄へして雨垣を摧き。池は水草に埋れて。蛙あらそひ梟も。所得貌に嘯きて。誠に氣

疎分野かな。

詞「いかに誰かある。濱田こそ此度御免を蒙りて罷歸りたるぞ。此よし申候へ。

ツレ女「や。是は目出度御事にて候。いそひで此由北の御方へ申さふずるにて候。いかに申上候。殿の御歸りにて候。急ひで御対面候へ。

シテ「何。殿の御歸りと申か。あらうれしや焉くに御渡り候ぞ。

ワキ 「なふ某こそ歸りて候へ。何とてかやうに御やつれ候ぞ。

シテ 「実や何事も。隔てぬ中といひながら。かく浅ましくおとろえし。姿ま見ゆる愧かしさよ。さりながら。君を思ひの涙の面に。花の袂は朽ぬとも。情の色はうつろはぬ。心の内を思ひ知れ。

ワキ詞 「勝々うれしき仰かな。我も年月思ひの外に。つらき配所の身と成しも。花の袂に置露の。むすぶ契

りの色かへぬ。

カヽル 「心のとがと夕月の。

シテ 「都隔つる遠島に。

ワキ 「うき春秋を。

シテ 「ふるさとは。

同 「浅茅が原とあれ果て。く。昔忍ぶの軒端もる。月はけうとき影ながら。かはらぬ色ぞ嬉敷。実やあふせは久堅の。雲るとゞろく鳴神も。おもひし

中はさけぬと聞に付ても。たのもしやく。

クリ地

「実や臂上の蜥蜴色変ぜず。鹿葱花発けて更に。萎む事なし。」

シテサシ

「彼唐の貞女と哉覧は。両夫にま見えん事を恥て。」

同

「おもひの淵に身を沈め。桑を拾ひし女は妻の。不義を恨みて身を失ふ。」

シテ

「是皆直なる貞節の。」

同

「心を見する。ためしとかや。」

クセ

「爰に武蔵守。師直と聞えし。いみじき人の有けるが。其比出雲の国の守。塩冶の高貞といふ人の。妻は世上にかくれなき。美人の聞えありしかば。師直垣間見て。和利なく思ひ染衣の。色に出行恋ごゝろ。物やおもふと人のとふ迄うつゝなき。涙の床に起もせず。寐もせで夜半をあかしがた。汀にあさる雁金の。翅につけて玉章の。数かさなれど徒に。ふみ返さるゝ丸木ばし。落る袂の涙こそ。」

恋しき人の記念なれと。おもひ返して返すだに。
手やふれけんとおもふにぞ。我文ながら。うちも
おかれずと。読やる言の葉にめでゝ。

シテ
「唯さよ衣とのみ。」

同
「返ししければ。あだ人の。こはそも何と夕貌の。
空めもやらでくり返す。心まどひて事とへば。さ
なきだに。おもきがうへのさよ衣。我妻ならぬ。
妻なかさねそと読し歌の心ぞと。聞よりいとゝあ

くがれて。飛たつのみ歟恋ごゝろ。情も知らぬ武
士の。さるなき中言によりて。うき名。高貞諸
共に。身を捨て世語りの。哀れ今更知られたり。
去ながら。それは昔のあだ人の。うき身を捨て物
語り。是は二度故里に。帰りあふせの身ぞうれし。
シテ
「嬉しさを。何にたとへん夕暮の。月も晴行思ひ妻。
ともにかたしく袂かな。」

地
「袂も袖もうちかほる。古き軒端の梅のはな。」

シテ「今悦びの。」

同「色はへて。立まふ姿も花やかに。雪をめぐらす小
忌衣。返す心もうつゝなや。しづやしづ。(舞)

シテ、ワカ「賤や賤。しづの小手巻くり返し。

地「昔を今に返す袖かな。く。」

アタル「返す袖かな。」

シテ「返すうれしきあふむの袂。

同「返すうれしきあふむの袂。人のみるめもいとはぬ

中の。思ひも今はあら磯島津鳥。憂を忘るる都
の春の。月はむかしにかはらぬ閨ふく松風に。浮
世の夢も明方の空の。虚言なかりし誓ひの言葉。
く。の。すゑ頼もしき契かな。